

修士論文（要旨）
2025 年 1 月

動詞〈見る〉の辞書記述をめぐって

指導 青山 文啓 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム
223J1002

王 崧宇

Master's Thesis (Abstract)
January 2025

The Versatility of the Japanese Verb "MIRU"

Songyu Wang

223J1002

Master of Arts Program in Global Communication

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

目次

第1章 序論	1
1.1 研究背景	1
1.2 データの表示方法	1
1.3 問題提起	1
1.4 要約：小説『容疑者 X の献身』	3
第2章 <見るト>における働きかけのない従属句	5
2.1 連続を表す<ト>	5
2.1.1 連続を表す<ト>とテ	5
2.1.2 原因・理由を表す<ト>とテ	7
2.1.3 本節のまとめ	7
2.2 発見の<ト>	8
2.2.1 典型的な発見の構文	9
2.2.2 非典型的な発見の構文	11
2.2.3 本節のまとめ	12
2.3 後件の行われる時を表す<ト>	14
2.3.1 時間副詞で示す場合	15
2.3.2 補助動詞<ている>で示される場合	16
2.3.3 <時間詞+になるト>で示される場合	16
2.3.4 時の<ト>と<トキ>との転換	18
2.3.5 本節のまとめ	19
第3章 <見るト>における働きかけのある従属句	20
3.1 後件の行われたきっかけを表す<ト>	20
3.1.1 きっかけによる反応	20
3.1.2 内的きっかけ	21
3.1.3 きっかけによる物理状態変化	22
3.1.4 きっかけによる感情変化	23
3.1.5 本節のまとめ	24
3.2 因果を表す<ト>	25
3.2.1 <きっかけ>と<因果>との転換	27
3.2.2 <連続><発見><時>と<因果>との転換	28
3.2.3 転換不可能の<見るト>	28
3.2.4 本節のまとめ	29

第4章 おわりに	31
参考文献	32

要旨

これまで、複文における接続助詞〈ト〉の機能や、動詞〈見る〉の用法に関する研究は個別に行われてきたが、両者の相互作用に焦点にした研究は限られている。本研究では、接続助詞〈ト〉を用いた複文において動詞〈見る〉が、どのような意味機能を持つのかを明らかにすることで、動詞の辞書記述における不足部分を補い、日本語文法を体系的に理解することへの貢献を目指す。以下に、〈見るト〉用いる典型的な例文を3つ挙げて述べる。

- (1) 石神美里は靖子をちらりと見ると、運動靴を脱ぎ、無言で部屋に上がってきた。[DSX-JP25-17] ＜連続＞
>
- (2) 目覚まし時計を見ると、五時近くになっている。[DSX-119-14] ＜発見＞
- (3) 壁際にバドミントンのラケットが置いてあるのを見ると、彼は懐かしい気持ちになった。[DSX-72-12] ＜きっかけ＞

(1) は＜連続＞に属する用例である。この文は、主語「美里」が行う一連の動作が客観的事実として述べられており、従属句が主文に影響を及ぼしていない。

(2) は＜発見＞に属する用例である。ここでは、従属句の視覚的行為が主文で新しい情報の発見を導いている。＜連続＞と＜発見＞の共通点は、従属句が主文への働きかけが見られない。一方、＜連続＞は同一主語による一連の動作を表すのに対し、＜発見＞は従属句の主語が動作を行うことにより、主文で発見されたモノ・コトの状態を示す、という相違が見られる。

さらに、＜発見＞の用法は視覚以外の五感にも拡張することが可能である。この場合（例：ふむと、ころころしたかたい感じがしました。）は、発見という意味を視覚的なものから、聴覚、嗅覚、触覚、味覚などにまで拡大すると、従属句の主語が＜…自覚する＞という過程を経ることによって発見に至るというものである。その結果、主文が必ずしも物事の状態を述べる形になるとは限らない。すなわち、〈ト〉に前接する述語が変わることにより、構文の適用範囲も変化する。

(3) は＜きっかけ＞に属する用例である。ここでは、視覚的行為が感情変化のきっかけとして機能している。このような用法では、通常、従属句の主語Yの動作また作用によって、主文の主語Xに動作または作用が起こることを表す形である（例：五郎君が頭をなででやると、犬はよろこんでしっぽをふった。）。ただし、接続助詞〈ト〉に前接する述語が〈見る〉の場合、感情の変化しか表すことができない。この場合も、〈ト〉に前接する述語が変わることにより、構文の適用範囲が変化することが見られる。

本研究を通じて、動詞〈見る〉と接続助詞〈ト〉の相互作用の解明を進め、動詞の辞書記述に新たな知見を提供することを目指す。

参考文献

- 亀井孝ほか[編](1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」,『言語研究』15;『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦[編],むぎ書房 1976
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 前田直子(2009)『日本語の複文:条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志(2013)『日本語構文意味論』くろしお出版
- 豊田豊子(1978)「接続助詞「と」の用法と機能(1)」『日本語学校論集』5
- 豊田豊子(1979a)「発見の「と」」『日本語教育』36号
- 豊田豊子(1979b)「接続助詞「と」の用法と機能(3)」『日本語学校論集』6
- 豊田豊子(1982)「接続助詞「と」の用法と機能(4)」『日本語学校論集』9
- 豊田豊子(1983)「接続助詞「と」の用法と機能(5)」『日本語学校論集』10
- 豊田豊子(1977)「「と」と「～とき(時)」」『日本語教育』33号
- 鈴木重幸(1978)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 吉川武時(1974)「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学校論集』1